ワイルドとアメリカのジャーナリズム

原　田　範　行

1882年1月から12月にかけて、オスカー・ワイルドはアメリカ各地で150回に及ぶ講演をしているが、その第2回目は、1月17日、フィラデルフィアの「園芸会館」で行なわれた。演目は残された草稿などから、「芸術と職人」と推定される。「我々の求める芸術」は、非実用的な装飾を凝らしたものではなく、むしろ「現代文明を基礎とし、現在の生活のあらゆるニーズに合致した」ものであって、そういうものこそ美しく、それを作り出す職人の技をこそ讃えるべきだというのが、その趣旨だ。[1]

この講演のちょうど後半に差し掛かるところで、ワイルドは、ジャーナリズムへの言及を挿入している。草稿に基づいてその大意を要約すれば、次のようになる。「新聞には芸術を語る資格はない。例えば、彫刻家をその作品によってではなく妻の扱い方によって、画家を収入の額によって、詩人をネクタイの色によって判断させようと躍起になっているからだ。現代の新聞は、悪意や中傷に満ちたグロテスクなものであって、避けたいと思う話題だ。だから、こういう非芸術的な話は早々に切り上げよう。」(p. 305) この挿入の直前でワイルドは、金細工師の、一見単純で地味な技と仕事ぶりから生み出される高貴にして優美な作品を賞賛し、そういう職人を皆で育てて行かなければならないと語っている。そうした質朴な精神性を破壊してしまうものこそ、中傷めいた報道にほかならないということで、ジャーナリズム批判のためにわざわざ脱線した箇所と言えよう。

「早々に切り上げよう」と言うのであれば、そういうジャーナリズムとは距離を置き、それとは別の形で自らの表現世界を構築すればよい。例えば演劇において、商業的な上演を嫌って自らの理念を体現すべく独自の劇場を生み出したグランヴィル＝バーカーやジョージ・バーナード・ショー等はまさにそういう道のりを辿った。だがワイルドは、本格的な経歴の出発点とも言えるこのアメリカ講演旅行から、逮捕・受刑の晩年に至るまで、一貫してそうした道を選ばなかった。

「たとえ『ニューヨーク・ヘラルド』紙が酷評したとしても、誰がミロのヴィーナスの美しさを否定するものか」、彼はそう言って憚らない。[2]それにもかかわらず、実はアメリカ滞在中、彼は寸暇を惜しんで各種ジャーナリズムの取材に応じ、その言動が批判的に報じられれば報じられるほど、闘争心を掻きたてられるかのごとく、さらに多くのジャーナリズムと関わっていったのである。言うまでもなくこの方向性は、後の彼が、例えば、『ペル・メル・ガゼット』の定期寄稿者になり、『ウーマンズ・ワールド』では編集長を務め、さらに創作の題材を新聞や雑誌の中に求めたりするといった、批判しつつも密接に関わり続けるという彼とジャーナリズムとの関係を十分に予感させるものと言えよう。そうした彼とジャーナリズムの関係がアメリカでどのように始まったのか、舞台がアメリカであったことの効果は何か、そしてその舞台がイギリスに変わることの意味は何であったのか—それが本シンポジウムにおける私の検討課題である。

ワイルドが講演旅行に赴いた1880年代のアメリカは、『ニューヨーク・ヘラルド』や『ニューヨーク・トリビューン』、『ニューヨーク・タイムズ』など、代表的な日刊各紙が、南北戦争の報道を機に販売網と販売部数を急速に拡大していた。アメリカは、まさに新たなジャーナリズム大国としての相貌を明らかにしつつあったと言える。その中で、いささかセンセーショナルな報道をもって読者の購買意欲を掻き立てる、いわゆるイエロー・ジャーナリズムの萌芽も見られた。もちろん、例えばウィリアム・ランドルフ・ハーストやジョウゼフ・ピュリッツァー等による典型的なイエロー・ジャーナリズムの新聞の発刊は、ワイルドの講演旅行後のことであるから、彼がこれらのセンセーショナルな新聞・雑誌を直接相手にしたわけではない。ただ、直後に出現するそうしたイエロー・ジャーナリズムに至る状況は十分にあったと言えよう。

もっとも皮肉なのは、滞米中のワイルドへの批判的な報道には、例えば『ニューヨーク・トリビューン』など、むしろ伝統的な、反イエロー・ジャーナリズム的な新聞が多く含まれていたということである。ワイルドは「芸術を語る資格なし」としてジャーナリズムを断罪した。それはイエロー・ジャーナリズムへの流れを想起すれば、きわめて理解しやすい。しかし、実際にはそれだけでなく、彼は伝統的なジャーナリズムとも敵対し、そうしたジャーナリズムからセンセーショナルな存在として断罪されていたのである。アメリカ滞在中、彼はしばしば半ズボン姿で報道陣の前に姿を見せ、美を語り、ジャーナリズムを断罪しているが、それは確かに、イエロー・ジャーナリズムを嫌う伝統的なジャーナリズムに対して、きわめて挑戦的な言動と映ったに違いない。イエロー・ジャーナリズム

のスキャンダル報道を批判するだけなら、自らがスキャンダルになる必要はない。それにもかかわらず、彼は敢えてそれをしているのだ。それは一体なぜか？ここで考えられるのは、そういう半ズボン姿のワイルドを格好のネタとするイエロー・ジャーナリズムも、また、センセーショナルな話題を批判しつつも結局はその批判をネタとして紙面に取り入れている伝統的なジャーナリズムも、ワイルドにとって大きな差異はなかったのではないか、むしろ、良心的という仮面を被る新聞こそ、イエロー・ジャーナリズムにも増して批判すべきである、そういう意識を彼が持っていたのではないかということである。すなわちジャーナリズムは、それが良心的であるか否かにかかわらず、その根底には、不特定多数の読者の趣向に沿う話題を提供するという大衆性があり、そこにこそ、彼の関心と批判が集中していたのではないか、と考えられるのである。実際、この大衆性への侮蔑は、アメリカから帰国した直後にパリで完成させた『パドュア大公妃』をはじめ、ワイルドの著作に頻出する。1891年2月に発表された『社会主義下の人間の魂』では、ジャーナリズムや書籍出版を含む大きな「プレス」が、かつての「拷問台」に劣らず「ひどいもので、間違っており」、人心を乱していると、彼は痛烈な批判を展開する。[3]ジャーナリズムと大衆性—その連想の中に、どうやら彼は良心的か否かというような区別をしてはいないのである。

それではなぜ、そうした大衆的で暴力的でさえあるジャーナリズムと、美を称揚するワイルドは敢えて関わり続けるのか。ここで検討すべきは、彼が何に美を見出していたかということである。次の二つの引用は、先に触れた「芸術と職人」という講演の一節である。それぞれ、金細工師の創意と繊細な技、マサチューセッツ州コンコルドの小さな侘びしい家に住む屋根裏の天才エマソンに彼は注目する。

> [S]earch out your workmen and, when you find one who has delicacy of hand and that wonder of invention necessary for goldsmiths' work, do not leave him to toil in obscurity and dishonour and have a great glaring shop and two great glaring shop-boys in it (not to take your orders: they never do that; but to force you to buy something you do not want at all). (p. 304)

> The little house at Concord may be desolate, but the wisdom of New England's Plato is not silenced nor the brilliancy of that Attic genius dimmed . . . . (p. 308)

また彼は、アメリカ講演旅行から帰国後の1883年夏にロンドンで行なった「アメリカの印象」と題する講演の中で、小さなオアシスに準えられたアメリカの美しい少女の姿を次のように語っている。

> American girls are pretty and charming—little oases of pretty unreasonableness in a vast desert of practical common-sense.[4]

興味深いのは、いずれも、ワイルドがこよなく愛する美もしくは芸術が、それとは相反する巨大な状況や背景と常に対比的に語られているということである。彼が賞賛する金細工師は、いやに目立つ大きな店には似つかわしくない、ニューイングランドのプラトンの知恵は豪邸にはない、そして不合理なまでに美しい少女の背景にあるのは広大な砂漠―。アメリカ社会の中でワイルドが力説した美や芸術は、周囲にある醜悪な非芸術と際立った対比構造の中に見出されるものであった。否、彼の創作における細部の描写へのこだわりなどを勘案するならば、こうした対比構造は、その後も一貫して彼が抱き続けた美意識や創作理念の一つの型であったとも言えよう。「人生の大きな出来事は、まさに大きな出来事であるように見えるからこそ奇妙で扱いにくいものだ。だが小さな出来事こそは象徴と言える。私たちは、その小さな出来事から容易に人生の辛い教訓を受け取るのだ」、彼は晩年の『獄中記』においてそう記している。[5]

「人生は芸術を模倣する」―ワイルドがアメリカ講演において展開したこのような美意識が、その人生においても模倣されるとすればそれはいかなる形においてか？小さな美と、その周囲を取り巻く巨大で醜悪な非芸術、あるいは非芸術が周囲にあるからこそ、そしてそうしたものを一種の苦痛として常に「拷問台」のごとく抱え込まなければならないからこそ、際立って対比的に浮かび上がる人生の美しさとは何か？　言うまでもなくここで自然に想起されるのが、ワイルドという個人とジャーナリズムに表象される大衆性との関係である。つまり、自らの美意識を自らの人生において体現する一つの方途として、彼はジャーナリズムとの対比的な関係を選択していたのではあるまいか。この意味で、後年の創作や評論活動において、ジャーナリズムが体現する大衆性といわば戯れつつ、しかしこれを厳しく指弾するワイルドの二重性の原点は、いち早く、このアメリカ滞在時の彼のジャーナリズムとの関わりの中に求められるのではないかと思われるのである。

ただしここで見落としてはならないのは、アメリカ滞在時のワイルドのジャーナリズムとの関わりには、ある限界が存在したという点である。彼は後年、『社会主義下の人間の魂』の中で、アメリカとイギリスのジャーナリズムを比較しているが、その大意を要約すれば、次のようになる。「アメリカのジャーナリズムは、その横暴な力が極致にまで達しているので、逆に人々はそれぞれの好みに応じて、ジャーナリズムを楽しむ者もあれば、拒絶する者もある。だがいずれにしても、それをあまり真剣に受け取ることはない。ところがイングランドの場合、そこまで極端ではないものの、相変わらず強い力を持っていて、人々のプライヴェートにまで及ぶ専制的な力を発揮している。」[6] かつてジョン・ラスキンはアメリカに出かけるワイルドに、「連中は君の全てを語り尽くすだろう、連中に容赦はないのだ」と語ってジャーナリズムへの警告を与えたと言われる。[7] そして確かにイエロー・ジャーナリズムに至るアメリカのジャーナリズムは、ワイルドのプライヴェートについても全く容赦をしなかった。しかしどうやらアメリカ社会は、ジャーナリズムが過激であればあるほど、読者は適当に折り合いをつけているらしい。この自由かつ広大な国にあっては、どれほどワイルドがあたかも「全てを語り尽く」されるかのようにプライヴェートをパブリックの中に溶解させたとしても、ワイルドの個とその周囲を取り巻く醜悪な非芸術的ジャーナリズムという対比があまり効果的には機能しない―。彼はアメリカで、実はそういう感触を得ていたのではないかと思われるのである。アメリカ講演旅行中、彼は尋常ならざる頻度でジャーナリズムとの接触を繰り返しているが、それは、自らの言説が予想以上に拡散してしまい、自らの個とその周囲を取り巻く醜悪なジャーナリズムという対比を体現できないことへの焦慮によるものだったのではあるまいか。

そしてもう一つ、ワイルドとアメリカのジャーナリズムとの関わりにおける限界として触れておかなければならないのは、結局のところ、アメリカにおけるワイルドは、サヴォイ劇場で上演されていたギルバート・サリバン・オペラと同じく、稀代の興行師リチャード・ドイリー・カートが設けた舞台で美の化身を演じる役者に過ぎなかった、ということである。そこでは、たとえ「全てを語り尽くされた」としても芝居が終ればそれまでのこと。彼はコロラド州レッドヴィルでシェイクスピアの『マクベス』上演を観劇しているが、まさにこの「世界一裕福な」鉱山の町にまで出かけて坑夫に語るワイルドの姿は、資金調達を大きな目的とするこの講演旅行を演じるマクベス風の「哀れな役者」の姿と重なりあう。その希薄さ、空疎さから脱し、ジャーナリズムとの本格的な関わりを取り結ぶことのできる場所、醜悪な非芸術性がジャーナリズムの中に集約されているからこそ

個性を発揮しうる場所、真に守らねばならないプライヴェートがパブリックと混交するその刹那において激しい軋轢を生じ、その軋轢があるからこそ自らの個が美しく輝く場所—そういう場所は、アメリカ講演旅行で訪れたそれぞれの場所ではなく、ロンドンだったのである。

注

1 要約原文は、"Art and the Handicraftsman," *The Collected Works of Oscar Wilde*, ed. Robert Ross, rept. ed. (London: Routledge / Thoemmes; Tokyo: Kinokuniya, 1993), vol. 15 より拙訳による。以下、本作品からの引用は本文中に頁数のみを記す。

2 引用は、*Rochester Democrat and Chronicle* (8 Feb. 1882), quoted in Richard Ellmann, *Oscar Wilde* (1987; London: Penguin, 1988), p. 176 より拙訳による。

3 引用は、"The Soul of Man under Socialism," *The Complete Works of Oscar Wilde*, Perennial Library Edition (New York: Harper, 1989), p. 1094 より拙訳による。

4 引用は、"Impressions of America," *The Works of Oscar Wilde*, Sunflower Edition, rept. ed. (New York: AMS, 1980), p. 261 より拙訳による。

5 引用は、De Profundis," *The Complete Works of Oscar Wilde*, p. 901 より拙訳による。

6 要約原文は、"The Soul of Man under Socialism," *The Complete Works of Oscar Wilde*, p. 1095 による。

7 引用は、Richard Ellmann, *Oscar Wilde*, p. 168 より拙訳による。